



Title	妊婦健診の変容に伴う妊婦の身体感覚と胎児への愛着に関する研究
Author(s)	鈴木, 江三子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47523
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	すず い え み こ 鈴 井 江 三 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (保健学)
学位記番号	第 21019 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	妊婦健康診査の変容に伴う妊婦の身体感覚と胎児への愛着に関する研究
論文審査委員	(主査) 教 授 大橋 一友 (副査) 教 授 永井利三郎 教 授 島田三恵子

論 文 内 容 の 要 旨

I 研究目的

本研究では、妊婦健康診査の変容と妊婦の身体感覚に焦点を当て、妊婦が求める妊婦健康診査のあり方を再考することを目的とし、次の3つの目的を設定した。先ず第1に、超音波診断による妊婦健康診査の成立基盤となった病院出産の達成要因について、医療制度の再編に伴って施行された諸政策を基に歴史的に概観した。また、超音波診断装置の機器開発の推移と、同機器が妊婦健康診査に導入されていく過程を明らかにした。第2に、日本における妊婦健康診査はどのように変容したのか、全国の出産施設を対象に横断調査を実施し、回答のあった569施設(回収率37.9%)を対象に分析を行い妊婦健診の特徴を明らかにした。そして、第3に、妊婦健康診査を受けとる妊婦への影響はどうであるのかを明らかにするため妊婦身体感覚尺度を開発し、妊婦健康診査形態別の妊婦身体感覚尺度と胎児愛着尺度の関連性を検討した。この際、妊婦の身体感覚を客観的に評価するため、第1因子「全身的身体感覚」14項目、第2因子「局所的な身体感覚」8項目、第3因子「胎児位置身体感覚」4項目で構成された「妊婦身体感覚尺度」(Somatosensory Scale of Pregnancy ; SSOP) (26項目)を開発した。そしてSSOPとMullerの「胎児愛着尺度」を併用して、妊婦健康診査形態別の出産施設において、初産婦390人を対象に調査(妊娠中期、妊娠末期)を実施した。なお、妊婦健康診査形態別の出産施設とは、毎回の妊婦健康診査時に超音波診断を提供する施設を「病院」「助産所あり」、提供しない施設を「助産所なし」、の3群であった。

II 研究結果

日本における妊婦健康診査は、1970(昭和45)年頃から超音波診断を含む妊婦健康診査が急速に普及し、1981(昭和56)年には一般化したと考えられる。全国を対象にした横断調査の結果、2005年現在、超音波診断は妊婦健康診査に必要不可欠な存在になっているといっても過言ではなかった。また、妊婦健康診査の形態は出産施設の種類によって相違があり、主に「妊婦健康診査毎の超音波診断の有無」、「妊婦健康診査の実施者」、「妊婦健康診査の実施時間」、の3つの特徴があった。その特徴は出産施設によって相違があり、3群に大別できた。そこで、3群の調査対象施設において妊婦の身体感覚と胎児への愛着の関連性を明らかにした。その結果、妊婦の胎児位置身体感覚得点は妊娠中期には「病院」に比して「助産所あり」が、妊娠末期には「助産所あり」と「助産所なし」が有意に高い値を示した。胎児愛着得点は妊娠中期、妊娠末期共に病院に比して「助産所なし」が有意に高く、「助産所なし」と「助産所あり」

は有意差がなかった。全身的身体感觉得点と局所的な身体感觉得点は、妊娠中期、妊娠末期を通じて「病院」、「助産所あり」、「助産所なし」、の3群間に有意差はなかった。また、胎児位置身体感觉得点と胎児愛着得点には有意な相関 ($p < 0.000$) があり、相関係数は0.427 (妊娠中期0.372、妊娠末期0.323) であった。すなわち、胎児位置身体感觉得点と胎児愛着尺度得点には関連のあることが分かった。また病院に比して、胎児位置身体感觉得点は「助産所あり」、胎児愛着尺度得点は「助産所なし」で有意に高い値を示した。

論文審査の結果の要旨

妊娠の進行によって妊婦が感じる感覚（妊婦身体感覚）は母性の発達に重要であると考えられているが客観的に証明された報告は少ない。また、近年の医療技術の発達に伴い、妊婦健診においても超音波診断法が常時行われるようになり、健診の内容も大きく変化してきた。この健診内容の変化が身体感覚に影響を与えているとの報告が社会学者などよりなされているが、健診の内容がこの身体感覚にどのような影響を与えているかについても十分な検討は行われていない。

本研究では日本における妊婦健診内容の全国調査を行い、妊婦健診の形態は主に「妊婦健診ごとの超音波検査の有無」、「妊婦健診の実施者」、「妊婦健診の実施時間」の3つの要素から分類が可能であることを見出した。次に、妊婦身体感覚を客観的に評価するための「妊婦身体感覚尺度」を独自に開発した。この尺度は「全身的身体感覚」、「局所的な身体感覚」、「胎児位置身体感覚」の3因子より構成されている。以上の2つの研究結果を踏まえて以下の研究を展開させた。

出産施設を超音波検査の頻度が高く、妊婦健診を医師と助産師が短時間で行っている「病院」、超音波検査の頻度が高く、妊婦健診を助産師が時間をかけて行っている「助産所あり」、超音波検査の頻度が低く、妊婦健診を助産師が時間をかけて行っている「助産所なし」の3つに分類し、妊婦身体感覚尺度得点と胎児愛着得点について検討した。その結果、「病院」と比較して妊娠中期には「助産所あり」が、妊娠末期には「助産所あり」と「助産所なし」において胎児位置身体感觉得点が有意に高値を示した。さらに、胎児位置身体感觉得点と妊婦の胎児愛着得点との関連を見出した。以上の結果より、妊婦健診の内容は妊婦身体感覚や妊婦の胎児愛着に影響を与えていることが客観的に示され、超音波検査に伴う胎児診断に傾倒した妊婦診察ではなく、妊婦の身体感覚にも注視した診察内容の重要性を明らかにした。

本研究は今後の妊婦健診や保健指導に重要な示唆を与えるものであり、博士（保健学）の学位授与に値するものと考えられる。